

J-CEF NEWS

no. 3

2014 SPRING

リレーエッセイ

○ 「私」と「社会」の関係性を紡ぐ

／木村充（東京大学大学院学際情報学府博士課程／一般社団法人広島国際青少年協会少年事業副委員長）

実践事例紹介

○ 未来の有権者が生の政治を身近に感じる「未成年“模擬”選挙」

／林大介（模擬選挙推進ネットワーク事務局長／東洋大学社会学部社会福祉学科助教）

書評

○ 道はみんなのもの（クルーサ 著／モニカ・ドペルト イラスト）

「遊ぶ」が勝ち ～『ホモ・ルーデンス』で、君も跳べ！～（為末大 著）

／西川正（NPO 法人ハンズオン！埼玉 常務理事）

特集

○ 「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」

／原田謙介（NPO 法人 YouthCreate 代表）

／水山光春（京都教育大学教育学部教授）



「私」と「社会」の関係性を紡ぐ

東京大学大学院学際情報学府博士課程
一般社団法人広島国際青少年協会少年事業副委員長
木村 充

高度化・複雑化する社会の中で途方に暮れる若者——現代の日本の若者を取り巻く状況は、このように表現できるのではないだろうか。現代社会では、霧の中に迷い込んだかのように、社会全体を見通すことは困難である。それゆえ、若者は、「私」しか視界に入らず、「私」に意識や行動が自閉し、「私」と「社会」のつながりを感じることができないでいる。社会に対する効力感が無く、自分が行動しても社会を変えることはできないという無力感に支配されている。

無関心・無力感の蔓延は、社会システムとして健全な状態とは言えない。言わば、細胞や神経、免疫の機能を失い、自己調整できなくなった生命体のようなものである。社会システムは、人間が集まって構成される。個々の人間の行動は、社会システムに直接的あるいは間接的に多少なりとも影響を及ぼす。システムを変えることができるのは、システムを構成する個々の人間にほかならない。しかし、現代社会では、自分の行動が社会に影響を及ぼすという

感覚は、希薄なものとなっている。

無力感、環境との相互作用の中で学習される。つまり、自分の努力が成功に結びつかない経験を繰り返すと、環境に対する効力感を失い、無気力に陥る。逆に、無力感を解消するためには、自分の努力によって環境を変化させるという成功経験を蓄積しなければならない。それゆえ、それぞれが自分の努力によって社会を変える経験をし、社会に対する効力感を得ることが重要である。しかし、高度化・複雑化した社会システムの中では、そのような効力感を養うことは困難となってしまっている。

一般社団法人広島国際青少年協会では、「ぼくらの町」というプログラムが実施されている。「ぼくらの町」では、子どもたちが、自分の力で自分の町をつくる。誰もが何らかの職業に就き、仲間と力を合わせて働くことで、給料として「ガバス」をもらう。どうすれば会社をうまく経営できるか、一生懸命に考え、試行錯誤を繰り返す。

そうやって苦勞して稼いだ「ガバス」を使って、税金を納めたり、他の子どもが経営するお店で食事や買物をしたりする。ときには議員として政治に参加する。小さな町だからこそ、社会全体を見通すことができ、「私」の行動が「社会」に影響を及ぼすことができる。社会に参加し、社会を担うために必要な力は、実際に社会に参加する中でよりよく獲得されるのではないだろうか。

シティズンシップを育む教育は、諸所で様々な実践され、実践知が蓄えられつつある。しかし、それらは未だに断片的なものに留まっており、より効果的な教育を推進するためには、研究者と実践者がお互いに知見を交換し合い、理論と実践の融合を図ることが重要であろう。日本シティズンシップ教育フォーラムが、社会変革の担い手を育む実践と理論の統合の拠点として機能し、社会全体を覆う霧を晴らすための大きなエネルギーとなることを願っている。

木村 充 (m.kimura@kimuramitsu.ru)